

もう一つの「命のビザ」

ユダヤ人救出、オランダ領事に脚光



「命のビザ」発給に携わったオランダ名誉領事のヤン・ズワルテンダイク(親族提供)

リトアニア・カウナスで第2次世界大戦中の1940年、日本領事代理の杉原千畝(1900〜86)がナチス・ドイツなどの迫害から逃れるユダヤ人難民に、日本に渡れる「通過ビザ」を独自の判断で発給した。数千人の命を救ったこの人道措置を巡り、難民が日本から避難先の国に向かえるよう、もう一つの「命のビザ」を発給していたオランダ名誉領事ヤン・ズワルテンダイク(1899〜1976)の功績に近年、注目が集まっている。

杉原千畝記念館に展示

カウナスには、旧日本領事館を改装した杉原記念館がある。その一角に昨年6月、ズワルテンダイクに敬意を表した展示室がオープンした。

当時、総合機大手フリックスのリトアニア支社長を務めながら、名誉領事を引き受けていたズワルテンダイク。展示室にはフリックスが提供した当時のラジオのほか、パイプや眼鏡といった愛用品が並ぶ。

ラムナス・ヤヌライテイス館長は、ズワルテンダイクが杉原に並んで「リトアニアの歴史にとって非常に重要な人物だ」と強調した。

キユラソービザ

1939年、ドイツ軍のポーランド侵攻で第2次大戦が勃発すると、中立国リトアニアの臨時首都だったカウナスにはユダヤ人が押し寄せた。ソ連のリトアニア併合前後の40年7月、ズワルテンダイクは身の安全を危惧したユダヤ人の求めに応じて「キユラソービザ」を出した。カリブ海のオランダ領キユラソーへの入国にビザは不要と記すことで、見かけ上、最終目的地がキユラソー

だと示すビザとして機能したという。

発給数は週間で少なくとも2034枚に上る。このビザと日本の通過ビザを手にした人々は、ソ連を横断して欧州大陸を脱出。福井県敦賀市や神戸市などを経由し、米国や豪州、イスラエルなど各地に渡った。

ズワルテンダイクの次男ロブさん(84)によると、一家は40年9月、ナチス占領下のオランダに帰国。父親は「リトアニアでのことは決して話すな」と家族に口止めたという。

ホロコースト知って

戦後も「やるべきことをやっただけ」と多くを語り、「謙虚な人だった(ロブさん)」というズワルテンダイクだが、ビザを発給した人々の「その後」は気にかけていた。「ビザを受け取った人々の95%が救われた」というユダヤ系人権団体の調査を記した感謝の便りが届いたのは、その葬儀の日だったという。

オランダでは2018年、紹介する書籍が出版され、その名が知られるようになった。回国政府もその功績を認め、昨年9月に名誉勲章を授与。日本国内でも同月以降、功績を伝える展示会が東京や杉原の記念館がある岐阜県八幡津町などで行われつつある。